

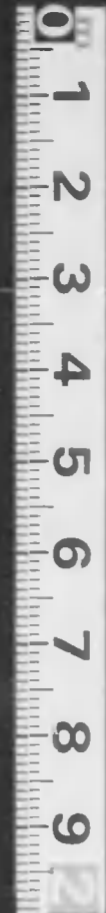
寫眞週報

情報編輯局
三月十日・第二十六號・第七

昭和二十一年三月十日
第三十六號
第二十六號
第七



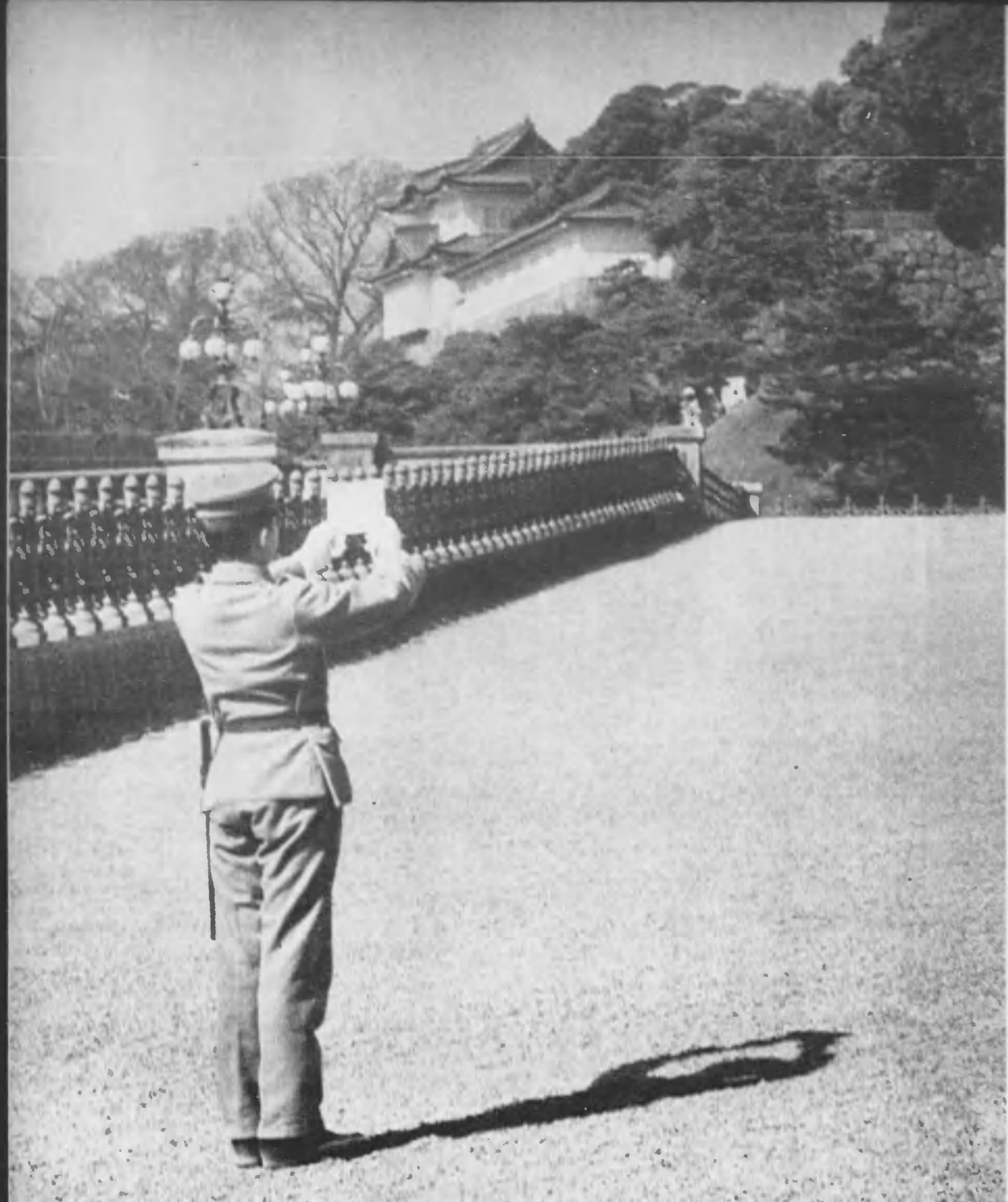
陸軍
記者



撃^うちてししま^やむ

撃^うちてししま^やむ

撃^うちてししま^やむ



撃ちてしまむ

醜の御槍の

御誓ひ

宮城に對し奉つて音吐
朗々『軍人に賜りたる勅
諭』を奉唱してゐる陸軍
幼年學校の生徒、陛下
の股肱たるの矜持と覺悟
を身體一杯に輝かせてゐ
る姿だ

そのかみ神武天皇が長
髓彦御討伐の際に
みつみつし 久米の子等
が 垣木に植ゑし葦、口
ひびく 吾は忘れじ 衆
ちてしまむ

と將兵の士氣を鼓舞遊
ばされ、將兵また『撃た
ずばしまじ』の攻撃精神
に燃え熾つた
この氣魄をうけついで
三千年、『撃ちてしま
む』は大和男子の血潮に
脈搏ち、國難來るごとに
爆發した

醜の御槍たるを誇り笑
つて草むす屍とならん意
志。うちに潜む烈々の國
魂が火華を散らす暈しさ
わが民族の決戦精神
『撃ちてしまむ』の凝集
をこの幼年學校生徒の姿
にみる



撃ちてしまわむ

断じて 撃つ

すすす、がくん、舟艇がつひに敵地に乗りかけた。息詰る緊張が、新たな闘魂に盛りあがる待ちに待った瞬間だ。煙霧にとちこめられた身邊の空気を、悲鳴に近い金屬音で、敵弾がひき裂いてゆく。かーん、かーん、舟艇を射抜いてゆく敵弾が水煙と沫をあげて水面につきささる。一人々々の兵隊が一丸の熱火となり、敵陣に炸裂すべく突進する……

香港島へ、コレヒドールへ、壁のやうに遮る弾幕を覚悟の前で、皇軍將兵は上陸して行つた。断じて撃つべく、最後の止めを刺すべく。萬死に身を挺し、命を最後の瞬間まで燃えつくして敵を斃さねば止まぬ撃滅精神に、抗し得るものがどこにあらう



撃ちてしまわむ

なほ残る 片手あり

片手兩足を擽けても我になほのこる左手あり。よしたとひ兩手兩足を擽けても、この命あるかぎり、眼々の鼓動と共に、「撃ちてしまわむ」の闘魂はよつ／＼と沸りたつのだ。思へば硝煙たちこめたあの戦野に、この手、この足を失つたとき、幾人かの戦友は草むす屍と散つていつたのだ。共に死すべくして生き得た命に、今は傷痍の勇士といふ榮譽さへ飾られて再起した自分だ。銃を執るとはゆるされなくとも、この鐵腕が、この鐵脚が、人一倍の働きをしてくれる。共に散らうの誓ひをはたした戦友よ、見てくれ。この旋盤のバイトに仕上げられてゆくピストリングの二つ／＼が、鋼鐵の武器となつて君の僕の代りに宿敵の息の根を止めてくれるのだ。命かぎり根かぎり、銃後に闘はむことを、戦友よ、君の靈に誓はう



撃ちてしまふ

兵器は

俺が造る

『少年航空兵となつた隣りの三郎さんが初陣に敵機二機を撃墜したさうで、村中の評判はそりや大變なんだよ。』昨日郷里のお母さんから来た手紙にさう書いてあつた。サブちゃんは偉いなあ、だが待てよ、サブちゃんが少年航空兵になるといつたとき、『よし、それならサブちゃんの乗る飛行機は俺が造る』と誓つたのはこの俺だつた。そして『頼むよ』といつたのは彼だつた。

サブちゃんよ、俺は造つてゐるぞ。飛行機になくはならぬポールペアリングを。君が手柄をたてたといふ君の愛機のポールペアリングは俺が造つたんだ。サブちゃんよ！ うんと敵機を叩き落してくれ。人生の門出に君と誓つたやうに、俺はあくまで工場で寝るぞ。



撃ちてしまふ

闘志を

土に

『多忙な農閑期は二倍の増収を約束する』——この厚い土の救へを身につけて、平時ならばまだ焚火を囲む冬籠りの農家にも、既に来るべき秋の豊かな稔りを願ふ一年の取闘が始められてゐる。

山も野も、道も家も、すべては雪に覆はれて、吹雪の猛る嚴寒の朝も眞黒に凍結した堆肥を糞に棄せて、兎のほかに汚すものもない純白の野面に運び出す村人たちは、やがてその重い堆肥を凍てつく雪を碎いて降してゆく。

腰の冷えも手の凍えも何んのその、大戦下、日本の兵站基地を確保すべく營々と積み重ねてゆくその勞苦こそ、全國五百六十萬農民の撃ちてしまふ姿でなければならぬ。

撮影 梅本 忠男



撃ちてし止まむ

頭上の水弾

飛び散る火沫を蹴兜にはねかへして、先陣はすでに爆燃する火點をめがけて突進した。後れてならじと、身を躍らせて待避所を出た若く逞しい婦人防空戦士の一人。やにはに一バケツの水弾はわれとわがその頭上に浴びせかけられた。お、一團の火焰に體當りの構へはなるその一瞬。一たとへ縁の黒髪は焰に焦げ、わが身一つは火柱となつて燃え上らうとも、いかでかこの尊い國土の空に敵機の狼藉を許すべき。三千年、男々しき久米の子らを生み育ててきた卓國のをみな心はいま燃えさかる火焰の前に美しく昇華する。撃ちてし止まむ。黙々と猛訓練に傾けつくして、断じて皇天皇土を護り抜く一億必勝の備へがこゝにある。

撮影 加藤 恭平



撃ちてし止まむ

夫の遺志を生く

今日お習字の時間に、臨時教材で、陸軍記念日の標語を書かせてみた。二年生にはむづかしいとは思つたが、よく言葉の意味を話してやると、子供心にものみまふたらしい。尋かに水を落いて、眞剣な手帳たすの面ざしを思ひながら、一字、一字に事丸をつけてやる。「おとていさま」ふいと、夫の面影が心の片隅をよぎる。サッチャンの健全な発想、前ずかなほろ／＼とした喜びが身軀を包む。「自分は日本一の空を撃ちて止まむ、をたゞ八とすおに大団に散つた夫、その切ない遺志をわたしの胸に、サッチャンの胸に、そめてわたしは、戦へたすおにも前みこみ、受けついでけるのだ。

撮影 仙波 謙



兵農一如 闘魂

イヤー、トウ！
 全身全霊を打ち込んで、
 裂帛の気合もとも練出
 した必殺の一撃！田圃へ
 の往きを、脚りを利用し
 て、貫空つけた農兵が神
 武錬成のひとときです。
 こゝは新潟縣の岩山
 村、昨年の春、村長の提
 案で鉄剣道による村民の
 錬成が企てられ、村の
 辻々に桑の假標と竹槍が
 備へつけられてからは、
 人も牛も、敵も、肥桶も
 この假標の前を無難に通
 り過ぎることを許されな
 い鉄剣道に生きる村だ。
 いまも練出された手
 練の一本は、見事、假標
 の心臓部を貫いて、農兵
 の面目まことに躍如！
 かくて一年三百六十五
 日、雨の日も風の日も培
 はれてゆく強靱な一人
 一人の力を結集して、全
 村米穀撃滅へ！健兵健民
 の備へはいよ〜固〜

撮影 梅木 忠男



撃ちし止まむ 三勇士の 後をつぐ

昭和七年二月二十二
 日、廟行頭の激戦でわが
 一兵一等兵江下、北川、
 作江の三勇士は爆弾をか
 かへて敵鐵線網に飛びこ
 み、見事に血路をひら
 いて壯烈な戦死を遂げか
 ！爆彈三勇士、あの鬼神
 も哭く闘魂は、今日もな
 ほ孤々と我がますらをの
 胸に傳はつてゐる……上
 海事變から十二年、あの
 時、母の膝に乳をのんだ
 子孫たちは、今日では國
 民學校の上級生になつた
 或る日の放課後、東京
 都の青松寺前の三勇士像
 に三々五々、子供たちは
 バケツと雑巾をもつて、
 ほこりにまみれた勇士の
 身軀を洗ひはじめた。
 ていねいに、ていねいに勇
 士の肩に觸れ、勇士の膝
 に觸れ、その心に蘇へる
 ものは、勇士の後をつぐ
 嚴肅な大和魂のをさな
 心にふくらむ思ひだつた

撮影 空月 文吾

エリヌ

畫 一陸山横



コノテキヘイハ、
ニシ、アメリカ
ノハクマハ、
ハタラフンドシ
シテキマス。ヨク
カンガヘテカラク
レヨンドヌツテゴ
ランナサイ



エリヌ

畫 介進川石



コノテキヘイハ、
ニシ、アメリカ
ノハクマハ、
ハタラフンドシ
シテキマス。ヨク
カンガヘテカラク
レヨンドヌツテゴ
ランナサイ

進



戦場通信二

第一〇三三部隊
陸軍一等兵 齋藤芳郎

第二信

一月十一日

お母さん

上陸以来最初の雨でした。夜もすがら、椰子や檳榔樹の青葉をたいて、雨は激しい地鳴のやうに降り籠めたのです。この晩私等は、バラックにおける第一回目の戦闘直後の破れた體を、サンホセといふ小部落の民家に横たへながら、甘蔗島のあたりから起る潮のやうな葉ずれのさわめきを聴いてゐました。

一月九日の朝は、ナチブとマリベレス山の上半身を包んだ低い雲の塊が、白々と明るい清涼の戰場をやらかく覆つてゐました。四方から、ナチブの左側で、十センチ口径らしい敵砲兵が活動を始め、友軍の前線あたりにはしきりに黒煙を噴きあげてゐます。バラックで停場にした比島兵のジョレンは、あの弾着はオラニ附近だと思ひますが、われわれは今日はおこなまで前進するのですか、とときりに心配してゐました。

十時かつきりに、私等の部隊はしめつた砂地の道を進撃しました。デナルピヤンを出た丁字路の手前で、先頭の車輪が止まりました。背を伸ばして見ると、右手に通じる壊れた橋を修理してゐる列から、第一分隊櫻木上等兵、吉野の二名負傷しました、と沈痛な報告がきました。敵の彈着は、距離が非常に近づいたため、観測所の背後に固定しました。影山の、方向よし、遠く百メートル、といふ報告を聴くまでもなく、敵陣所は最近のところに近づいてゐるのではありません。あと百メートルを詰めれば、観測所は砲撃隊なので、先時から影山の報告を胸の中で計算してゐた中隊長が指揮小隊長に言ひました。

「この調子だと、観測所に命中するまではあと十分間はたつぷりある。十分間のうちに、食ふか食はれるか、こいつとわたり合ふんだな。」
そして放列係の通信手に通話を取らされました。だがその時、通信手の藤澤上等兵が、受話器を耳から離し、中隊長をまといで囁めながら、突然ずろ／＼と涙を流すのです。駄目か、切れたのか、と中隊長が叫びました。

「補隊に行つてきます。中隊長様」と藤澤上等兵がやに／＼と泣き上りました。馬鹿、お前は任務が違ふ、と中隊長は怒鳴りつけておいてから、霧の空に待機してゐた通信手の田中を呼び、観測所の破壊だ、と短く命令しました。

「返事ただけで、田中は中隊長に一禮すると、作業場にゐた者等に約くやうに弾を投げつけてから、急いで階段を下りて行きました。通信線の修補が成るまで、私等は建物の陰に退避することになり、全隊裏庭に下りました。弾着はちり／＼と落ちて、五十メートルのところに炸裂してゐました。煤風が窓

工兵隊の兵隊等が、壕の中からしきりに赤旗を振つてゐるのを見て、私が砲撃が起つて虚空から金屬性の弾道が迫り、前方の甘蔗島に炸裂しました。同時に先頭の車輪が四輪ばかり、矢のやうに丁字路を互に走り抜けました。すると壕の中の素子様の丁兵隊が煙のやうに飛び出た、はた／＼と作業を始めました。二分後に工兵隊は壕の中にもぐりこみ、先頭の四輪がエンジンで進めようとするのを待たせ、前と殆んど同じ場所に敵砲が炸裂し、四輪が煤風を突つ切つて丁字路を出る。工兵が橋の上に躍りあがり、一人が私等の方を眺めてにや／＼笑つてゐました。

サンイシドコロ附近の一軒屋に到着したのには十一時を少し過ぎた時刻でした。一軒屋は道の左側の、椰子とバナナの樹に囲まれた二階造りの洋館でした。このあたりは地形が極めて悪く、他に観測所を設置することが困難なだけに、私等は白いトタン屋根が敵の恰好の目標になるのを覚悟の上で、洋館の二階を観測所と決めたのでした。

案の定、私等が二階から更に梁に上り、鐵柱で屋根の斜面に足をかけてゐると、敵が観測所の左側方に凄まじい炸裂音を轟かし始めました。敵の先に先を越されたのです。もう／＼／＼してはゐられませんでした。ガラスを砕き、硝子と硝子があたり一面を飛び、破片が壁や屋根に突き刺さりました。炸裂の度に起る地震と煤風で物がふら／＼になるので、私等は窓ガラスに貼る外からの石の落段の間に、一かまきりになつて身を押し寄せてゐました。

「中隊長がくす／＼笑ひながらどなりまわす。その聲の響きの中に、ふいに私は中隊長の深い愛情を感じ、思はず胸がつか／＼しましたが、やがて、親友等や上官と、身を寄せながら、一團となり、う／＼と息を吐き、死の岐路に立つてゐるのだといふ意識が不思議に安らかな静寂と、また／＼かき信



「中隊長がくす／＼笑ひながらどなりまわす。その聲の響きの中に、ふいに私は中隊長の深い愛情を感じ、思はず胸がつか／＼しましたが、やがて、親友等や上官と、身を寄せながら、一團となり、う／＼と息を吐き、死の岐路に立つてゐるのだといふ意識が不思議に安らかな静寂と、また／＼かき信

ん。穴の中から眼鏡の首だけ出して、その砲兵がすか／＼と砲撃を繰り返して捕へ、直ちに射撃が開始されました。すると、まるで待たせてゐたかゝやうに、ナチブの左側、椰子とバナナの樹に囲まれた一軒屋の二階を、目眩むばかりの鮮やかな緑の光を放つてゐます。〇〇倍の眼鏡の中に、それはまるで生物のやうにむく／＼と盛り上つて見えるのでした。

友軍の〇〇部隊や〇〇部隊が、観測所の左方陣地から射撃を始めました。発射音と弾着音が折／＼と交錯して、虚空に充滿しました。

「敵兵は少くとも九ヶ中隊の兵力です。しかし敵は地の利を得てゐる上に、偽装が巧みで、全然砲撃すら発見できません。半ばはカンで方向を測定して二階の作業場に報告し続けましたが、それでも頻々と射撃してくる新しい砲兵を次ぎ／＼に掴みとることは出来ないのでした。

「観測所の五百メートルばかり左前方にある〇〇部隊の放列が、最初激しい敵の集中砲火を浴びてゐました。附近の甘蔗島が火を發し、煤煙のあとから、鋭い黒煙が煙のやうにのたうちながら立ち上つてゐます。その時は、ともすれば眼鏡の世界を揺る／＼と逆／＼／＼とまふのです。放列ではそれにも屈せず盛んに射撃を続けてゐました。

「私が私の胸に湧きた／＼してくるのです。私等は皆死んで、誰か一人でも生き残るために本能的に眼を伏せてゐました。腕の時計を見ますと丁度十二時なのです。私は噴きまわした。先刻からの激しい戦闘の中で、一切の時間の経過を忘れてゐた私は、少くとも三時頃には死んでゐると思つてゐました。

「このうちに敵の弾着が次第に間近になり始め、九、六分ほど経つてからは、上射撃が止まりました。敵は別の目標に方向を変へたらしいのです。私等はほつ／＼と息を吐き、はた／＼といふ安堵が、一瞬間に私の胸を貫きました。船内の血を離解しました。しかし、その安堵がやがて激しい反撃心に変わりました。私等は立ち上りました。たが来た通信線の連絡はついてゐないので、射撃が出来ません。中隊長が板を再び補給に出しました。

「私ははた／＼と、恐怖の意識で衝動的にけいれんするジョレンの両手を解き、階段の下に戻りました。補隊から送られてきた坂本は、中隊長の前に半分もきとられた戦闘帽と、真黒に焼け焦げた受話器を差し出し、田中が戦死しました、と言ひました。この二つの品の他には、何も残つてゐなかつたといふのです。私はいまの先、補隊を命ぜられて出て行く際に、私等を二階、田中の約くやうな静寂を思ひ出し、照滅たる静寂を喚んでゐました。

例實の用活「札立の時」

指示板に努力を

長野縣白田町の稲荷町通

りである。雑貨商の菊原廣太(四十歳)と人形積つた雪をかき、今日も家の前の指示板へ時の立札を書き移してゐた。

「大東亞戦争の朝である。木炭を山から運搬に平気で来た平八さんが、牛をとめて、しばしそれを預かっている。平八さんが行く去つたあと、今度は「白田國民學校の生徒達が、前庭に行くらしく、受持の先生に引率されて前を通りかゝつた。

「指示板の前の集め、井出先生は「君も、これ集まれ、」と児童達を招き、先生がこれを読む。皆んな一緒にあつて高い聲で言つて「ご苦労。」

「時の立札」
ものと飛行機を
前線精兵が血を叫んでゐる翼の増強へ
最後一億の國魂を叩き込ませよう



「おた、無駄な買物はしないで献金したり、公債にして、一機でも多し機を造り出すのだ。」
「先生、ロカリマス。」
「はい、機水君、言つて見給。」
「お小遣で、使ハナイぞ愛國紙に献金。」

「おた、無駄な買物はしないで献金したり、公債にして、一機でも多し機を造り出すのだ。」
「先生、ロカリマス。」
「はい、機水君、言つて見給。」
「お小遣で、使ハナイぞ愛國紙に献金。」

「おた、無駄な買物はしないで献金したり、公債にして、一機でも多し機を造り出すのだ。」
「先生、ロカリマス。」
「はい、機水君、言つて見給。」
「お小遣で、使ハナイぞ愛國紙に献金。」

同組回覧の区情報に

大阪市此花区長 田中英一

「(前略)特に「時の立札」は自己反省に裨益するは元より國民の指導者として、好例のものとして、町會初め各種演説の講演會、座談會等の席上引用致し居る實に有之候處、特に「時の立札」一點の衣一袖の體態こそ國民力である。時、時衣は自らを引裂いて、自らを國を引裂いて喰ひ、遂に、海底に没入するの愚か、一國民の正に肝に銘じ、眼瞻致し可き警句と思料致し、當區刊行「此花區情報」に登載之普及徹底を圖り次第に御座候。右區情報には區内四百五十の隣組を通じて、二十万國民に國策の浸透實踐を促すと共に、戦時下の區内町會、各種團體の動靜を周知、以て國民進軍體制を確立するため、毎月一回五千部を隣組回覧として刊行致し居るものに御座候(後略)」

局内新聞に轉載

北海道十勝支庁大村町郵便局 大石 博

「(前略)特に「時の立札」は自己反省に裨益するは元より國民の指導者として、好例のものとして、町會初め各種演説の講演會、座談會等の席上引用致し居る實に有之候處、特に「時の立札」一點の衣一袖の體態こそ國民力である。時、時衣は自らを引裂いて、自らを國を引裂いて喰ひ、遂に、海底に没入するの愚か、一國民の正に肝に銘じ、眼瞻致し可き警句と思料致し、當區刊行「此花區情報」に登載之普及徹底を圖り次第に御座候。右區情報には區内四百五十の隣組を通じて、二十万國民に國策の浸透實踐を促すと共に、戦時下の區内町會、各種團體の動靜を周知、以て國民進軍體制を確立するため、毎月一回五千部を隣組回覧として刊行致し居るものに御座候(後略)」

大東亞戦争日誌

二月

十五日 ●(一)ソロモン群島方面 二月十日以降十五日までの航空戦において帝國海軍航空部隊の空襲並に陸軍地上部隊の砲火により敵機六十四機撃墜、一機撃破せり。この間我が方の損害、飛行機二機、軍用施設の損害輕微なり。(二)西南太平洋方面 二月一日以降十五日までの航空戦において帝國海軍航空部隊の空襲並に陸軍地上部隊の砲火により敵機五機撃墜、二機撃破せり。この間我が方の損害なし。十七日 ●帝國海軍航空部隊は二月十七日ソロモン群島サン・クリストバル島東方において敵機送艦隊を攻撃し、駆逐艦二隻および大型輸送船一隻を撃沈せり。この間我が方三機を失へり。二十一日 ●帝國陸海軍部隊は佛國政府の諒解の下に二月二十一日廣州灣佛國租借地に進駐せり。●帝國海軍航空部隊は二月二十一日長編ニューヘブライズ諸島エスピリット・サント島の在泊艦艇及び軍事施設に夜間攻撃を加へ、敵艦運糧一隻を撃沈、一隻に大火災を生ぜしめ、陸上施設にも損害を與へたり。我が方被害なし。

印度の友を救へ

印度救援國民大會 東京



「大東亞戦争開始以後、毎朝私の目を射る「時の立札」を何んども多くの人に讀ませたいと思ふ心で、私をして發に今迄に「この下」に下つてあつた官報が「タタ」等に書き、一帯人の喜びたことへ、そなく、毎週書きかへてゆく心は固くなるばかりです」

「大東亞戦争開始以後、毎朝私の目を射る「時の立札」を何んども多くの人に讀ませたいと思ふ心で、私をして發に今迄に「この下」に下つてあつた官報が「タタ」等に書き、一帯人の喜びたことへ、そなく、毎週書きかへてゆく心は固くなるばかりです」



日本の支那に對する横濱印度獨立聯盟の人々

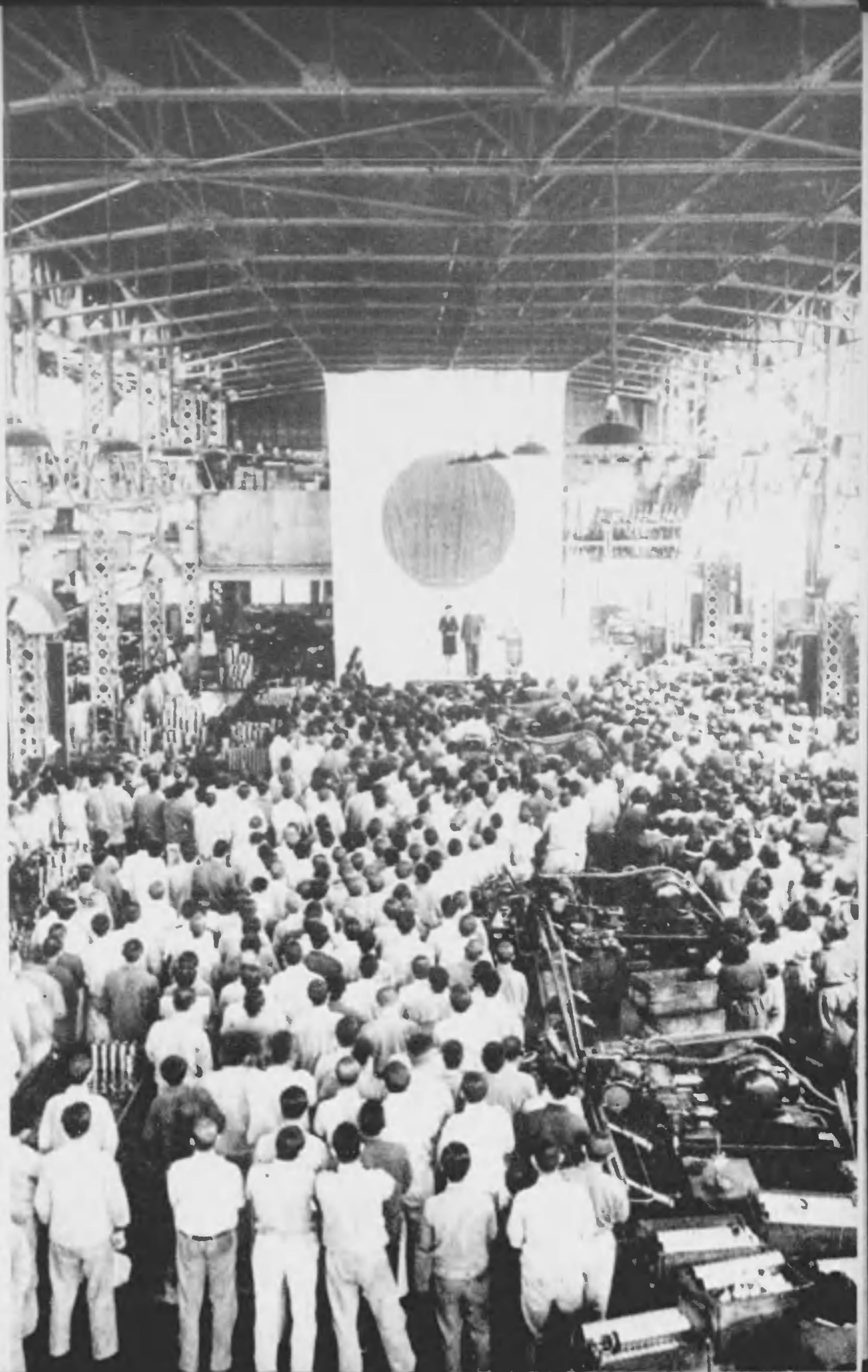


熱帯を攝る水井賢會長



カンチーを語る水井賢會長

産業第一線に激励隊 京東



職場激励

戦場がそのまゝ、激動の戦場となり、会場を埋め盡した産業戦士たちは、重休みの時間を利用して隊員の歌手と共に唱ひ寸暇を惜しく過ごした

宵々火を吐く激励の辭に、今更ながらのやうに女工員たちは責任の重大さを自覚し、やるわいの決意を満面に浮べてゐる

歌手も戦士も一體となつて、海行かばの合唱のうちに、撃ちて止むの決意が自ら高まつてゆく

危大なる消耗戦に備へ、決戦的作戦に應ずる軍需物資の生産増強を實現することは、産業人に與へられた輝かしい使命である

されば産業陣營の第一線部隊はこの重大使命達成のため、日夜汗と油にまみれ、轟音と熱火の渦の中で、堂々たる決戦のハンマーを振つてゐる

この第一線部隊を激励し、さらに撃ちて止まむ敢闘精神に、共に奮ひ起たると東京商工会議所會頭藤山愛一郎氏を團長とした職場激励隊は二月二十二日から一週間、連日産業第一線部隊を激励した日本精工〇〇工場を訪れた激励隊員一行は産業戦士の一団として、互ひに手をとつて誠意を披瀝し合ひ、その勞を稱ひ、士氣を鼓舞し、共に感激と信頼の決意を固め勤勞殉國の崇高なる職場精神に徹した

藤山團長は烈々と産業戦士を鼓舞激励した

健全微笑は明日の、いや、寸刻後の職能率を高める。激励隊員の獨唱に聞きはれる女工員はわれを忘れるゐる





⇒ 楽しい夢は早くもあの町、あの村へ。舞臺の製作がはかどります

⇒ 美しく明るい童話の世界を願ひながら描きながら

⇒ 演出の仕方でも栗津先生のご指導でなかなか上手になりました

⇒ 演劇の仕方でも栗津先生のご指導でなかなか上手になりました

弘と雀

女學生自作自演

芝居の演

女高二第立府都京

居徒生

モミヂのやうなお手々を叩いて……良い子よ育て、やさしく強く



⇒ 紙芝居のセンセイがいらしたつた、うれしいな



⇒ 物語のハナコちゃんと一緒になつて心配したり喜んだり

紙芝居は子供たちの世界の太陽です。青天井のもとで、くる日もくる日も無條件でこれに喝采を送る幾百万の少國民の姿を想像するだけでも、明るいものを感ずるではありませんか

京都府立第二高女のお嬢さんたちは、この紙芝居を教材に子供たちを立派な大國民に育て上げませうと、作文の時間に創作した日本の新しい童話を國畫の時間に楽しく描きあげ、手工の時間に最後の舞臺を製作して、附近の幼稚園や児童保護院を訪問、手風琴入りで熱辯をふるつてみましたが、お嬢さんたちがほんたうに一箇の生命をも可愛がつて注ぎこむこの愛の教育は、いつか子供たちとの間に優しい心のつながりをつくり『氣は優しく力持ち』の良い子、強い子の育成に大きな効果をおよぼします

撮影 石東長一郎



沈黙を驚かす米のヘンモロソ



然雷ドイ全で四危-ゴツカ



敵目へアリセム家空米



清州店

す駐進へ州清地借租佛



るさ沈撃砲水落の大般カリマ



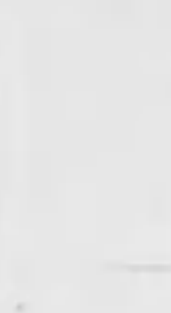
す上遊界租へ府城スラフ



威脅を路運米てし翔長雲海



沈黙を驚かす米のヘンモロソ



然雷ドイ全で四危-ゴツカ

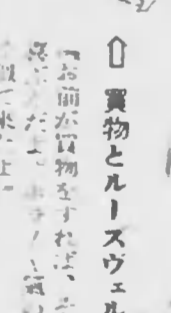


敵目へアリセム家空米

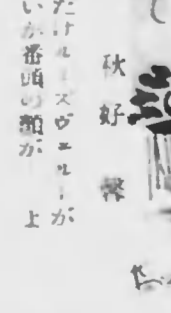


清州店

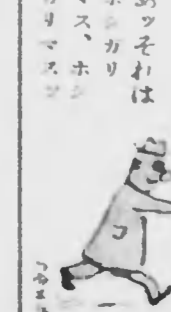
す駐進へ州清地借租佛



るさ沈撃砲水落の大般カリマ



す上遊界租へ府城スラフ



威脅を路運米てし翔長雲海



沈黙を驚かす米のヘンモロソ



然雷ドイ全で四危-ゴツカ



敵目へアリセム家空米



清州店

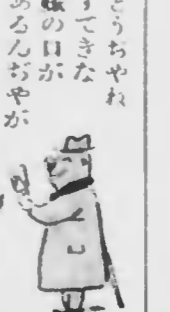
す駐進へ州清地借租佛



るさ沈撃砲水落の大般カリマ



す上遊界租へ府城スラフ



威脅を路運米てし翔長雲海



沈黙を驚かす米のヘンモロソ



然雷ドイ全で四危-ゴツカ



敵目へアリセム家空米



清州店

す駐進へ州清地借租佛



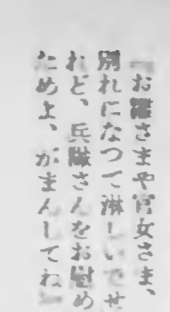
るさ沈撃砲水落の大般カリマ



す上遊界租へ府城スラフ



威脅を路運米てし翔長雲海



沈黙を驚かす米のヘンモロソ



然雷ドイ全で四危-ゴツカ



敵目へアリセム家空米

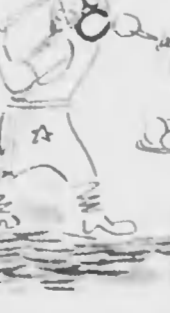


清州店

す駐進へ州清地借租佛



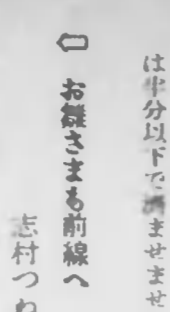
るさ沈撃砲水落の大般カリマ



す上遊界租へ府城スラフ



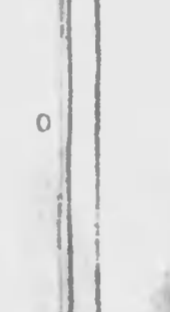
威脅を路運米てし翔長雲海



沈黙を驚かす米のヘンモロソ



然雷ドイ全で四危-ゴツカ



敵目へアリセム家空米



清州店

す駐進へ州清地借租佛



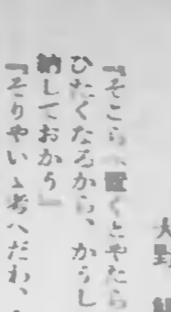
るさ沈撃砲水落の大般カリマ



す上遊界租へ府城スラフ



威脅を路運米てし翔長雲海



沈黙を驚かす米のヘンモロソ



然雷ドイ全で四危-ゴツカ



敵目へアリセム家空米

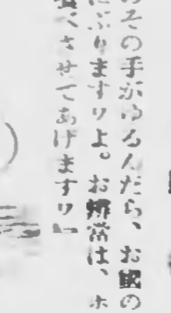


清州店

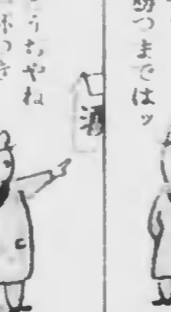
す駐進へ州清地借租佛



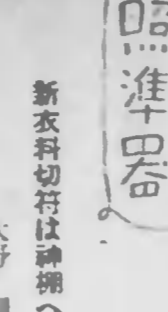
るさ沈撃砲水落の大般カリマ



す上遊界租へ府城スラフ



威脅を路運米てし翔長雲海



沈黙を驚かす米のヘンモロソ



然雷ドイ全で四危-ゴツカ



敵目へアリセム家空米

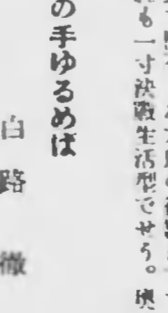


清州店

す駐進へ州清地借租佛



るさ沈撃砲水落の大般カリマ



す上遊界租へ府城スラフ



威脅を路運米てし翔長雲海



沈黙を驚かす米のヘンモロソ



然雷ドイ全で四危-ゴツカ



敵目へアリセム家空米

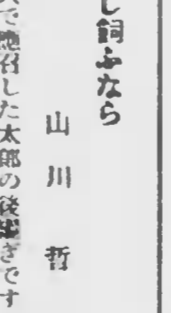


清州店

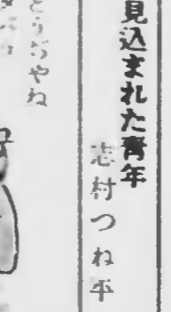
す駐進へ州清地借租佛



るさ沈撃砲水落の大般カリマ



す上遊界租へ府城スラフ



威脅を路運米てし翔長雲海



沈黙を驚かす米のヘンモロソ



然雷ドイ全で四危-ゴツカ

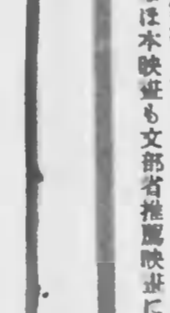


敵目へアリセム家空米



清州店

す駐進へ州清地借租佛



るさ沈撃砲水落の大般カリマ



す上遊界租へ府城スラフ



威脅を路運米てし翔長雲海

昭津器

新衣料切符は神頼みへ
大野 綱三

『そこらで買ってきたら使ひにくくなるから、からして奉納しておか』

『そりやいふおへだわ、今年は半分以下で済ませませう』

お嬢さまも前線へ
志村つね平

『お嬢さまや官女さま、別れ別れになつて淋しいでせうけれど、兵隊さんをお慰めするためよ、がまんしてね』



同じ飼ふなら

山川 哲

『軍用犬で飼召した太郎の後継ぎですわ、これも一寸訓練生活型せう。奥さん』

その手ゆるめば
白路 徹

『貴方のその手がゆるんだら、お嬢の腕力がにぶりますよ。お嬢は、ホラ私が教へさせてあげますわ』

見込まれた青年

志村つね平

どうやらね
太郎の
まんかね
お嬢さま
お嬢さま
お嬢さま
お嬢さま
お嬢さま
お嬢さま



受室

女學生部隊の一日入營
京都市 藤井 忠久

戦ふ日本の女學生として兵隊さんたちの生活を身をもつて味はつておきたいと、京都商業女學校の本年卒業生六十餘名は二月十八日、中部第三十七部隊に一日入營し、召された父や兄が入つた空門を感涙も深く見學したのち、引續き營内に居ました分隊員訓練を繰り返しました



春の雪風

品作所影攝京東 映大

ビルマ作戦におけるわが陸軍航空部隊の戦々たる武功の全貌を記録撮影したものである。航空部隊の基地における周到な作戦計画の状況に始まり、軍機決死の偵察に赴く偵察機の活躍、第一次、第二次、第三次と次々／＼に百機の雨を降らせて、敵陣と軍事施設を完膚なきまでに爆砕したラングーン爆撃、怒濤の連撃を繰り返すわが地上部隊と呼聲、緊密な協同作戦によつて次々／＼に敵陣地を覆滅し、援軍ルートを完全に封鎖した爆撃機隊の活躍、わが海上部隊部隊を擁護する堂々たる護衛隊の勇姿、壯烈なる空中戦等、わが陸軍の戦況を餘すところなくとらへるのと共に、基地における地上部隊のたゆみなき活動、敵陣地の寸暇に實心にかへり、或は風流を楽しむ軍醫の餘情餘々たる姿等を描き、ビルマにおける我が無敵陸軍航空部隊の不滅の偉功を例へるものである。文部省推薦映画と決定した。本映畫は米米の改良、『練り水』の研究に漢語する技師と、進んで米米不操の土地で地味に努力する若い養育指導員を中心に、これと協力する實用化の家族、研究所員、村人など目下、新生活途上にある我が軍米界の第一線に戦ふ人々の信愛と、眞摯挺身する姿を、観客に感銘深く描いてゐる。



記戦空航軍陸 民映



★表紙
突撃寸前の偵察機を静けさが一時天地を蔽ふ「うぬ」銃抱もくだけよとばかり振りしめた腕に鋼魂が振る。眼前生死はもとよりない。『撃ちてし山む』

これこそ 大君に擁護された和男子の全身全霊からほとばしり出る血の叫びなのだ
撮影 山崎眞研究所
海軍關係写真の複製複製は海軍省承認済(第五二四二號)

寫眞



寫眞週報 昭和十八年三月十日 第三種郵便物認可 昭和十八年三月十日發行（毎週一冊）郵政省登録 第三六六二號

第十回 特別報國債券

一等割増金 五百円
一枚・一円



賣出
3月1日より 4月30日まで

大藏省 逓信省 日本勸業銀行

内閣印刷局印刷發行

前線慰問に本誌を
お読みになつたら本
誌を前線慰問に送り
ませう。送料は内地
と同様で封封あるひ
は開封にして第二種
と明記すれば、一部
一銭です

所 達 申	定 價	情 報	寫眞週報 (發轉歌)
全国各地官報 販賣所 書店・郵便店 新聞販賣店 寫眞材料店	一部十錢 (送料一錢) ▲外島郵送は依 る地域は送料 共一部十九錢 ▲陸約配送御希望 の方は一部十錢 (送料一錢)の割 合を以て前金を 添へ御申込み下 さい ▲特大號の場合は 其の都度御申込 金より差額を申 受けます	昭和十八年三月 十日印刷發行 編輯者 情報局 東京市豊町一 本町一ノ一 印刷者 内閣印刷局 東京市豊町大土町	寫眞週報 (發轉歌)

(列前報週)A4的規定は33大の書本)